OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パキスタンの教育と男女格差 : パンジャーブ州マフタ村でのインタビューを通して
Author(s)	バッティー, 亜夢斗
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54681
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

申請先学部　人間科学部
採択番号　　No.9

平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	ばってぃー　あむと バッティー.A.亜夢斗	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3　年
ふりがな 共　同 研究者名		学部 学科		学年	年
					年

アドバイザー教員 氏名	大谷順子	所属	人間科学研究科
研究課題名	パキスタンの教育と男女格差～パンジャーブ州マフタ村でのインタビューを通して～		
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。		

１．研究の背景と目的

2014 年、パキスタン出身のマララ・ユスフザイがノーベル平和賞を受賞し、パキスタンにおける女子教育は世界的な注目を浴びている。しかし、日本や西欧諸国では女子教育の重要性を説くマララは高い評価を受けているが、パキスタンや他のイスラム諸国ではマララに対する批判も多いという。その一つはマララがパキスタンの教育や女性について誤った認識を世界に広めている、というものだ。

本研究の目的はパキスタン・パンジャーブ州マフタ村でのインタビュー及び参与観察を通してパキスタンにおいて教育の男女格差が生じる理由を考察し、パキスタンにおける教育観、女性観を明らかにすることである。

２．パキスタンでの教育の現状

パキスタンの若年層(15 歳～24 歳)の識字率は男性 79.1%、女性 61.5%であり、純就学率は男性 79%、女性 65%となっている。(※１)

このように、教育に関して決して十分な状態とは言えず、かつ男女格差も確実に存在している。

３．研究方法及び調査地について

マフタ村の人々に対しては半構造化インタビュー及び非構造化インタビュー、参与観察を行った。調査対象者に関してはスノーボール式サンプリングを用い、子どもへのインタビューに対しては保護者の同意を得た上で行った。また、現地で活動している日本の NGO(特定非営利活動法人 JEN・特定非営利活動法人難民を助ける会)及び国際協力機構(JICA)の方々へも構造化インタビューを行った。

なお、調査地であるマフタ村はパキスタンの中では比較的発展していると言われているパンジャーブ州の農村である。

４．要因別考察

・「バルダ」いう価値観

パキスタンで女性の教育を妨げる背景にある価値観としてしばしば指摘されているのは「パルダ」である。これは思春期以後の女性は夫や親類以外の男性に容姿を見せるべきではなく、また外で働くべきではないとされる価値観である。女性はこの慣習によって社会進出することが阻害されているため、男性と比較して教育を受ける必要性が低く、結果として男女格差が生じるとされていることが多い。

しかし、マフタ村の住民(40 代・男性・弁護士)はこう語った。

「西欧や日本では、パキスタンでは女性が見下されているというけど、実際はその逆だ。私たちは女性は保護されるべき存在だと考えているんだ。だから、女性が医者や政治家になることは誰も止めないけど、誰でもできるような仕事をするだけなら、家で保護されるべきなんだ」

別の住民(女性・20 代・教師)はこう語った。

「パキスタンで女性が外で働くとしたら医者か弁護士、政治家か教師ぐらいしかないのよ」

このようなパキスタンの現状を示す日本語文献は見つからなかったが、これらを裏付けるデータは存在する。パキスタンの女性議員比率は２１パーセントで、アメリカ合衆国(19%)、日本(9%)と比較しても高い(※2)。その一方で非農業部門の労働人口における女性の割合は 13%で、アメリカ合衆国(48%)、日本(42%)と比較すると著しく低い。(※2008)

つまり、パキスタンの女性は一部の社会的地位の高いとされている仕事に就労するか、家事労働をするかという男性と比べて極めて限られた選択肢しか持っていないのである。

・貧困

パンジャーブ州では義務教育は法律上無料となっているが、制服代や教材費、交通費は無料ではない。また、パキスタンの合計特殊出生率は 3.2(※4)で依然として高い。

このような条件のもと、上記(パルダという価値観)で述べたように、教育を受けたとしても女性の就労は男性にくらべて選択肢が極めて限られてしまう。

また、菅野は以下のように述べている。

女子は結婚し、親のもとを離れるが、男子は家を継ぐ。それゆえ、息子の教育費は、親にとって将来への投資として優先されるが、他家へ嫁ぐ娘の教育費は「無駄」と考えられる。

以上のような理由から、女子よりも男子の教育が優先されてしまうのである

・学校へのアクセス

パキスタンの特に農村部では学校が歩いて行ける距離にない場合が多い。当然、遠方に住んでいる子供達はバス等で通学することが必要になる。パキスタンではバスの上に乗ったり、横のはしごに乗ったりする若者を多数見かけるが、そのほとんどが男性である。住民(男性・30 代・旅行代理店勤務)はこういった。

「男子はああやって(多数の人が上に乗っているバスを指さしながら)通学できるが、女子はやはり席にすわらないといけない。これが男子の方が就学率が高くなっている原因でもあるんだ」

実際、バスの上に乗るときは席の上に座るときと比べ値段が 1 半分程度で済んだり、場合によっては無料でもよいそうだ。

また文化宗教的理由から、思春期以降の女性が学校に通学するには家族や親族が同伴しなければならないと考えている親も多く、その同伴の必要性が障害となり、結果として学校に通わ

せない親も多い。

・教育そのものの質とパキスタンにおける学校教育

以下はマフタ村の住民の方々へのインタビューの一部である。

・１２歳マフタ村の公立小学校に通う男子生徒

(学校は楽しいか？という問いかけに対して)「楽しいよ。先生はよくない人が多いけど、先生が学校に来ない日も多いし、勉強を楽しんでるんじゃなくって、学校で遊んでるってだけかな。(中略)先生はしょっちゅう棒で殴ってくるんだ。だから、先生が来ない日の方が楽しいね。(中略)(あなたの両親はそれを聞いても何も抗議しないのかという問いかけに対して)それはないね。パパもママも先生のことを信頼しているからね。抗議したとしたら退学させられるだろうしね」

・１７歳男性、５年前(４年生時)に公立学校を中途退学、以後ホテル勤務

「(前略)僕は先生からの体罰がひどくて辞めたんだ(中略)僕は読み書きが苦手だったからね。それが体罰を受けた理由。今、ホテルで働いている方が学校に行っていたときよりずっと楽しいよ」

・４０代男性、弁護士

「パキスタンでは体罰が原因で学校をやめる生徒は非常に多い。法律では全州で体罰は禁止されているが未だに、特に公立学校では広く行われているんだ。」

上記のように、特に公立学校を中心として教師が学校に来なかったり、体罰を加えるということがしばしば発生しており、教育の質は決して良いものではなさそうだ。

別の住民(３０代・旅行代理店勤務)はこう言った。

「女の子は大抵の場合、結婚して、家庭に入り、子どもを育てるだけだから、読み書きさえできたら問題ない。だから、頑張って学校なんかに行く必要はないんだよ」

また、ある女性(２０代・公立小学校教師)はこういった。

「高校まで卒業しないと勉強したことにはならないからはじめから小学校に行かせない親も多いのよ」

例えば、日本では学校は教科の勉強だけではなく、人間的な成長の場、社会性を獲得する場として捉えられているのではないだろうか。仮に将来、社会にでて就労する意思がなかったとしても、学校に行くことは当たり前なこととして捉えられているだろう。

しかし、マフタ村の人々の話を聞いていると「学校=教科の勉強を強制される場所」であり、将来いい仕事に就くためにいっている、と考えている人が多いのではないかと感じた。

特に公立学校の場合、上記であげたような体罰や教師が学校に来ないといった問題が多発しており、学校は子どもたちにとっては場合によってはつらい思いをする場所なのかもしれない。「女の子は学校に行かなくてよい」というのは女性には教育を受ける権利などない、と考えているからではなく、女性はつらい思いをしてまで学校で教育を受ける必要はない、と考えているからではないだろうか。

・学校の設備の問題

教育内容だけでなく、学校設備も大きな問題である。今回の調査を通してマフタ村にある小中学校３校を訪問したが、内１校では設備というは設備ほとんどなく野外に椅子と机があるだけだった。マフタ村で屋根がない家は一軒もないそうだが、学校には屋根がないのだ。この学校にはトイレの設備も存在していなかった。特に思春期以後の女子にとってトイレの設備がない

ことは重大な問題であり、男女格差を生む大きな要因の一つと言える。

・宗教学校(マドラサ)の存在

宗教学校(マドラサ・コーラン学校)とはイスラム教の聖典であるコーランを中心とした教育を行う学校である。ほとんどのマドラサでは授業料等は無料で、運営費は寄付等で賄われている。黒崎(※５)によるとパキスタンで学齢期の児童・生徒のおよそ 3%～6%がこのマドラサに通学しているという。マドラサの中にはディーニー・マドラサと呼ばれる政府宗教省公認のものも存在するが、政府公認でないマドラサも多数存在し、これらは教育統計では学校としてカウントされない。

ある男性(30 代・牧畜業・マフタ村周辺に住むアフガン難民)はこう言った。

「女の子はマドラサに行かしておけば十分だよ。コーランをしっかり教えてくれるし、読み書きも教えてくれるんだ」

コーラン学校は個人や各宗教団体で運営されているものが多く統計資料が少ないため、確かなことは言えない。しかし、就業の機会が男子に比べて少ないとされる女子にはマドラサで十分と考える親が多く、女子の方がマドラサへの入学者数が多いとすれば、統計上、男性の就学率の方が高いことの要因となりうる。

５．まとめ

パキスタンのごく一部の地域では登校中に女子学生が襲われたり、結婚を拒んだ女子が焼き打ちにあったりする事件が発生している。それらの事件は日本や欧米のメディア等でもたびたび報道されている。しかし、これらの事実を基に、「パキスタンでは女性が男性に比べて蔑まれている」と決めつけるのは間違いである。実際、ハイクラス層への女性の社会進出は確実に進んでいるし、アジア初の女性首相もパキスタンで誕生している。

日本人や西洋人はイスラム教を男尊女卑の宗教だと考えている人が多いが、今回の調査中、マフタ村の多くの人々が

「コーランには男女は等しい存在と書いてある」

という趣旨の発言をしていた。イスラム教は男尊女卑を認めていないのである。

今回の調査を通して、パキスタンにおける教育の男女格差は男尊女卑の価値観というよりも、「女性は大切に保護すべき存在」という価値観に様々な社会経済的な要因が組み合わさって生じているものだということだと分かった。「女性は大切に保護すべき存在」という価値観を否定するのではなく、この価値観と矛盾することなく全ての男女が安心して教育を受けられ、自らの進む道を自分で選択できるような社会となることが重要なのではないだろうか。

６．注釈・参考文献

※１　UNICEF statistics Pakistan 2013
※２　世界銀行　2015　(World Development Report 2015)
※３　世界銀行　2008　(World Development Report 2008)
※４　世界銀行　2013　(World Development Report 2013)
※５　黒崎卓 2013「パキスタンの教育制度の特徴と課題」『南アジアの教育発展と社会変容』一橋大学経済研究所
・広瀬崇子、山根聡、小田尚也、2011「パキスタンを知るための６０章」明石書店
・黒田一雄、横関祐美子、2014「国際教育開発論」有斐閣

・澤村信英編　2008 「教育開発国際協力研究の展開」明石書店
・マララ・ユスフザイ 2014（金原瑞人、西田佳子訳)「わたしはマララ」学研パブリッシング
・　菅野琴、西村幹子、長岡、智寿子 2014「ジェンダーと国際教育開発」福村出版
・Fareeha Zafar *Achieving Education for All:Pakistan* Commonwealth Secretarist,2007
・Qureshi, R., & Rarieya, J. F. A.　*Gender and education in Pakistan.* Oxford University Press,2007
・`I am not Malala' lauched Author comes down hard on Nobel peace laureate for alleged facts distortionNovember11,2015
http://nation.com.pk/editors-picks/11-Nov-2015/i-am-not-malala-launched
(最終アクセス日 2015 年１２月１０日)